

Kapwa 3に参加して—不安から感動、驚きへ

ミナミナの会 藤戸ひろ子

フィリピンへ招待されるかも……。と聞いたのは8か月前ほどだったでしょうか。今回の仲介役、稲村先生からキッドラット氏を紹介していただいたのが「森と草原の地球教室」でのイベント時でした。その時点ではハッキリ決まっておらず日程も定かではありませんでした。6月始め、稲村先生からメールで「キッドラット氏からフィリピンへの招待が決まり、父と一緒に参加してほしい」との事でした。ですが日程を見ると一ヶ月後、そして滞在は一週間と、木彫り職人の父にとっても、小さい子供がいる私にとっても悩む日程でした。ですがあれやこれやしているうちに本決まりになってしまい、行く事に……。

行くからにはしっかり役目を果たす!!!ですが何をやるのか、どういった事で呼ばれているのかハッキリせず、とにかく、「一緒に唄や踊りが出来て、英語が出来ない私や父のために通訳をしてもらえる子を見つけなければ」と、一緒にアイヌ民族の事を一生懸命学ぼうとしてくれるミアに声をかけてみる事にしました。二つ返事で喜んで一緒に参加してくれる事になりました。

そしてフィリピンへ行ってからきつと私たちと父とは別行動になる予感がし、父には父の弟子のサエキさんを同行させてもらうことになりました。

行くメンバーが決まり……。ですが現地で一体何をやるのか、やはり決まらず、とにかく私たちはアイヌ民族の事を少しでも知ってもらうために「言葉が通じなくとも唄や踊りは世界共通なのだから」とミアと二人で練習に明け暮れました。

父とサエキさんは、とにかくアイヌ民族の伝統であるアイヌ文様の木彫りが出来る状態を作れる様、彫刻するための木や色々な材料を用意してもらいました。

出発1週間前になっても現地でやることはハッキリせず……。 「とにかく何かをやる」ということだけでした。私にとってはとても不安な日々でした。私一人で行く……。ならば、何も聞かされていなくとも「何とかやるやあ〜」で乗り越えられます。ですが私の呼びかけで行くことにした父や弟子のサエキさん、私と一緒に唄や踊りそして通訳をしてくれるミアにとっては、私以上に不安だったはず。何度も私に「で、フィリピンで一体何をやるんだ?」と連絡もありました。そのたび私は「大丈夫。何とか絶対なるはずだから、必要と思ったものは全て持って行ける用意だけしておいてほしい」とお願いしました。

そしてお願いするばかりではなく、私自身も色々な物を用意しました。父が出発1週間前くらいに「サエキと二人で男の踊りしてやるから、男用の着物や手甲など作ってくれ。」との事。すぐに作り始

めました。作っていく中で、キッドラット氏を思い出しました。招待してくれた人に何にも感謝していないのでは……。

私たちアイヌ民族は全てに感謝を捧げます、心を込めて。一番大切な事を忘れていたのに気づき、キッドラット氏に感謝の心を込めマタンプシと着物、タマサイを作り始めました。

出発当日……。不安な気持ちを必死で抑えながら一緒に同行していただける日丸さんと合流、北海道に住む父とサエキさんとも関空で合流。いよいよ出発です。

どんな所なんだろう、どんな人たちが集まっているのだろうか、と期待と不安。でも楽しみにもなってきました。

そして到着。イベント会場とイベント名を初めて知りました。「Kapwa 3」。そして沢山の民族の集まり……。フィリピンには沢山の民族があるのだと初めて知りました。そしてセレモニーで、私たちは唄と踊りを披露しました。とても光栄な事でした。言葉は通じなくても思いが皆同じなのだと感じた日々でした。

そんな中会議もおこなわれていました。ミアの通訳を聴きながら思ったのは、どの民族も失われてきたものが同じで、今もなお続いている苦しみと闘いながらも次の世代へ伝えて行く強さ。

私たちもその会議で話す機会が少しでもあれば……。とも思いました。なぜなら唄や踊りや木彫りなど、アイヌ民族の伝統を伝えることはできても、「アイヌ民族は今……」というような話をする機会がなかったから。萱野さんが開会セレモニーでアイヌについてお話しをされたのですが、一日だけの滞在では、民族の歴史、文化、現状等について十分に語ることができなかつたと思います。かといって英語が出来ない私には、フィリピンのみなさんに直接話す事はできず、悔やんでもいます。

滞在3日目、子供たちへのワークショップが決まり、子供たちと一緒に唄や踊りやゲームをして交流をしました。参加した子供たちはやはり飲み込みが早く、あっという間に覚え、皆で輪唱したり踊り笑い合いました。

そして父たちはキッドラット氏の希望で現地の彫刻家とトーテンポールを作り合います事になりました。父たちも行く前の不安は消え去り、とても楽しんでいました。

言葉なんか通じなくもしっかりコミュニケーションがとれていたのには、驚きと嬉しくもありました。そしていつの間にか不安だった気持ちも消えさられていました。開催中に、集まっている各民族の方たちのどこからともなく唄が始まり、そして踊りが始まり、輪になりだし一つになる。その中に私た

ちも参加でき、リズムとともに、時にはアイヌの唄で他の民俗の踊りが始まる。時には他の民族の唄でアイヌの踊りが始まる。皆が教え合い一緒に歌い踊り笑顔が産れる。

言葉の壁はその時だけでなく、時間を忘れ、皆が一つになり声が重なりあい絆が産れる。

子供たちの演劇を観て、言葉はわからないけど、同じように辛く苦しい時代を生き抜いてきた先祖たち。そしてそれをしっかり受け止め今を生きる子供たちの輝きが、苦しくも嬉しくもあり、劇が終わったと同時に涙がこみ上げ、子供たちに「見せてくれてありがとう」と何度も言いました。

次の日、私とミアがアイヌの唄を唄っていると、前日、劇をしていた子どもたちが来て一緒に唄いはじめてくれました。そして「覚えたい」と言ってくれました。とても嬉しい事でした。アイヌ語で唄い、英語で唄い、そして子供たちの母国語で唄い、それを録音しました。嬉しさのあまりまたうれし泣きをし、皆で抱き合い、「また必ず会いましょう」と伝えあった事。この気持ちは文章にはあらわす事ができないほどの経験でした。

そしてKapwa最終日、前日まで刺繍をしていた着物やプレスレットの贈り物を、キッドラット氏を始め、各部族の酋長たちへ贈り物として渡せた事。そして笑顔で受け取っていただき、私たちの贈り物以上に沢山の贈り物をいただいた事。キッドラット氏には、前日まで作っていた着物を、いつかまた必ず会える事、Kapwaに私たちがまた参加できる事を願って、あえて刺繍の仕上げはせずに、「次に会う時に一つ刺繍をし、また次に会える時にまた一つ刺繍を増やしてく」と約束をかわした事。そして出発ぎりぎりの時間まで唄い踊り話し交流した事。

今回、私たちはミナミナの会として参加させていただきました。その中で、民族だとか民族じゃないだとかで伝える・伝えないは関係ない、民族じゃな

いから参加できない—それは違うのだと知ってほしい。なぜなら皆同じで、教える側も伝える側も知る側も伝わる側も平等でなければならない、アイヌ民族だからアイヌ民族の事を解っているとは限らないし、民族じゃないから民族の事は知らないとは限らない。皆が同じように知る権利があるし伝える権利がある。それを勝手に誰かが奪ってはいけないもの。そういった事も、他の民族も同じように教えられ伝えられている事を知りました。Kapwaに参加していなければこのような事も知る事が出来なかったかも知れません。そして自分自身が心の狭い人間なのだとして強く感じた機会でもありました。苦しい時こそ笑顔で乗り越えようとする強い気持ちがいじみ感じられた機会でもありました。

そして、驚くような経験もさせていただきました。

父は人前では踊ったりする人ではありませんでした。それは昔、父が若いころアイヌ民族が観光化しだし見世物になりはじめた頃、父にとって誇りであるアイヌ民族のプライドがゆるせなかったのだと思います。

ですがあんなに楽しそうに笑い合う父、トーテンポールを現地の彫刻家と作っている時の楽しそうな父の姿、参加者が集まり唄い踊りだし、父も一緒になって踊り出す姿を初めて見ました。

もう一つこれまでもこれからも二度とないのではないのでしょうか。

娘の作った衣装を着て娘の唄で踊る父の姿……。Kapwaの力に感謝です。本当に本当に参加出来た事に感謝です。招待して頂いたキッドラット氏、声をかけてくださった稲村先生、日丸さん。現地でお世話になった反町さん。そして沢山の交流、出会いと繋がりにソンモソンモイヤライケレ。

そしてKapwaで経験したことは終わりにせず、今後の活動に活かし役立てていきます。

Kapwa 3に参加して一試練を乗り越えて、繋がり

梶原美亜

フィリピンで先住民族会議が開催され、アイヌ民族として招待されているので、「通訳として、そして一緒に唄い踊ってもらえないかな」とミナミナの会の藤戸裕子さんに言われて、少しでも役に立てるならと参加することを決めました。

通訳を仕事としているわけでもなくアイヌの唄や踊りもそれまでに一度、子供たちとの触れ合いの場で踊っただけだったので、ほんとうに私なんかで大丈夫なんだろうかと何度か不安にもなりましたが、「神様はできない試練は与えない」と思い、それからフィリピンに出発するまでの一ヶ月、裕子さんに

指導してもらい、共に唄と踊りの練習を一生懸命しました。そして同時に、アイヌについて専門的な知識とそれを英語で話せるように毎日勉強しました。

一ヶ月はあっという間に過ぎて、気がつけば私たちはフィリピンの先住民族会議Kapwa3の開催の場に来ていました。Kapwa3の会場はビルの屋上を利用して作られていて、カフェやステージがあり池や木も生えていて小さな村に来たような素敵な空間でした。その会場を探検しながらKapwa3のためフィリピン各地から来ている様々な民族の方たちにあいさ

つをし、お互いどこから来たのかと話したりしました。

私たちはオープニング唄い踊ること以外、会期中どこで何をすればいいのかわからなくて、とまどうこともありました。そんな時おなじようにそこにいる他の民族の人たちと自然に会話が始まっていたり、お互いの楽器をもちよりセッションしたり、唄をうたい出す人もいれば踊りはじめる人もいて、それが次第にまわりをまきこんで素敵なハーモニーをそこに生みだしました。

時には言葉でうまく説明ができないこともあったけれど、みんな笑顔で唄い踊るときに生まれるハーモニーが言葉の壁も乗り越えられるすごい力になるんだと、これが Kapwa なんだと思いました。

私たちは Kapwa3 において、アイヌの唄と踊りをおどりました。また別の日には子供たちを集めて唄と踊り、ムックリの演奏などのワークショップも行いました。子供たちは唄も踊りも覚えるのがとても早くてびっくりしました。子供たちに限らず、参加したひとすべてとワークショップを通じてさらに交流を深めることができましたと思います。

会期中、私は英語で話さなければならぬので、朝から晩まで緊張しっぱなしでした。一対一で話すときはさほど緊張もせず、たとえ間違っても相手に伝えることができたのですが、大勢の前だと緊張してうまく話せない時もありました。

世界にはたくさんの民族がいて、私たちがそのすべてを知らないように、Kapwa に参加している他の民族の人たちも、アイヌ民族のことを知らない人たちがたくさんいます。一週間という短い時間のなかで、どれだけアイヌ民族とミナミナの会のことを知ってもらえただろうか。それが今回の使命でありながら、時に自分の能力不足で落ちこむこともありました。けれども裕子さんがトンコリで他の民族の人と音を奏で交流しているのを見たり、言葉はわからなくても、藤戸幸夫さんと御弟子さんのさいきさんが彫刻で交流しているのを見てとても励まされました。

私はそんな彼らと共に、与えられた時間により多くの人と交流して、ひとつでも何かを残せたらと一日一日を過ごしました。

最後に主催者のキッドラットさんをはじめ各部族の酋長たちに贈りものをし、あいさつを交わしたとき、みんなと過ごしてきたことを思いだし、また、ひとりひとりの笑顔を見ながら、民族は違ってもみんな心はつながっているんだと感じて涙が出ました。

アイヌではない私がこのような機会をいただき、貴重な経験をさせていただいたことにとっても感謝しています。これで終わりではなく、反省点を活かし、今後もアイヌの伝統文化を笑顔で学び伝えていく活動をお手伝いしていきたいと思っています。

K a p w a 3 に参加して一木彫り職人の証

藤戸幸夫

現地の部族の方々の方が誇りをしっかり持ち生きている姿に心打たれた。

現地の木彫り職人と一緒に木を彫る事はこれまでもこの先もない事。このような経験が出来た事にとってもうれしく思います。

そして木を彫っている時も色々な人たちが観に来て「一緒にやりたい」と言い、私が教えながら現地の人たちが彫る姿はとても心に残りました。

何よりも自分がこの地にいた証が出来た事にとっても誇りに思います。

本当にサイコーな日々でした。ありがとう。

今もイフガオ民族のベストを着ながら木を彫り続けています。

K a p w a 3 に参加して一木彫りと踊りでつながり

斉木寛史

同じ世代の木彫り職人と出会いとても刺激的でした。普段の経験とは違う事をさせてもらい、とても考えさせられる事が沢山ありました。

木彫り以外にも皆で踊り心が一つになって行く感じがし、繋がりを感じる事が出来た事がとても感動でした。

今後もこの経験を生かし木としっかり向き合い仕事をしてきます。

ありがとう。